



A日程

二〇二〇年度

尚綱学院高等学校

入学試験問題

国語

試験時間（五〇分）

注意事項

- 一. 「始め」の合図があるまで問題の表紙を開かないでください。
- 二. 解答用紙には決められた欄に受験番号のみ記入し、氏名は書かないでください。
- 三. 解答は必ず解答用紙のそれぞれ決められた欄に記入してください。
- 四. 印刷が見えにくい場合は、手をあげて監督者の指示に従ってください。
- 五. 考査が終わったら、解答用紙と問題用紙を別々にしておいてください。
- 六. その他すべて、監督者の指示に従ってください。

受験番号

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学一年生の「ぼく」、クボキ、やっちゃんの三人は、毎日放課後、雑木林で時間を潰す。ある日、林の中で、庭に大きな「お皿」(パラボラアンテナ)のある古い日本家屋を見つけた。「ぼく」たちはそれを「悪者の秘密基地」だと言い、毎日見張るようになった。

敵アジトの発見から一週間たってちよつとした事件が起きた。

アジトとお皿を取り巻く木製の柵が出来たのだ。

このせいで、ぼくたちの秘密基地からは中が見通せなくなってしまうた。また、お皿にもビニールシートが被せられ、外からはそれとは分からなくなった。

「なんか、あやしいで、お皿を隠しよつた」とクボキ。

「こつちのこと気づいたんやろか」とやっちゃん。

「特殊メガネでわかるんかもしれへん。赤外線やエックス線で透視できるんやろ」とぼく。

三人で議論して、ぼくたちは隠れ家を少し遠いところへ変更した。これしきのことであきらめたら、悪者退治はおぼつかない。

更に三日後、今度はもつと大きな事件が起きた。週末を挟んで月曜日に訪れると、柵の内側に銀色のドームが出現していた。

これには全員が興奮した。まだ科学と夢を単純に重ね合わせる事ができた一九六〇年代生まれのぼくたちにとって、銀色は未来の色であり、ドームは未来の構造物だった。千里の万博にだって、ドイツ館やみどり館などドーム型のパビリオンがいくつもあった。

もはや秘密の隠れ家から観察しているだけでは我慢できなくなった。

どうしても自制できず、柵のところまで近づいて、中をのぞいた。

ドームのようなものは、思いのほか大きく、直径十メートルはありそうだった。至近距離からだちよつとしたビルのような威圧感でそびえ立っていた。

ただ、材質はとても軽そうだ。風にそよいで表面が小さく波打っているのがわかった。きつとテントのように簡単な構造なのだと思つた。

ぼくたちはその形にまだ遠い二十一世紀を重ね見た。悪の秘密結社のことも頭の片隅に追いやられた。

いったい何なんだろうと口々に言い合った。

N A S A 説が再浮上して、ぼくとクボキが支持した。

いや、N A S A ではなくて日本政府が秘密裏に設立した宇宙科学技術研究所なのだと、

やっちゃんが新説を披露した。

そしてそんな議論に熱中するあまり、今度は下生えを踏む音が気づかなかつたのだ。最初に気づいてしまったのは、やっちゃんだったと思う。

やっちゃんは例によつて臆病で勘がいい。ふと振り向いた彼は、声もなく凝固した。クボキとぼくが異状に気づくまでの数秒間、彼はこの世のすべての恐怖をたつた一人で背負つて震えていた。

「やあ、初めてのお客さんだ」

にこやかな黒縁メガネの男が立っていた。

クボキがふり絞るように言い返した。

「騙されへんで、何か悪いことたくらんどるんやろ」

男はきよとんとして、「どうして」と言つた。

「秘密結社のアジトに決まつとるやろ」

「秘密結社だつて！」彼の口元が緩んで、大きな笑いになって爆発した。

建物に招き入れられても、ぼくたちは警戒心を解いたわけではなかつた。

藁葺きの古びた日本家屋の外観なのに、屋内は完全に洋風に改装されており、どこか怪しげだ。ぼくたちが通された居間兼書斎は真新しいピカピカの板張りで、そこにゆつたりしたグレイの応接セットが据えられていた。壁の一面は天井まで書架が造り付けられており、ぎつしり本やレコードが詰まつていた。そこには入りきらず、整理しきれない本の類

もあちこちに積まれていて、それらが奇跡的なバランスを保つて崩れずにいるのだつた。

振る舞われたココロを一気に飲み干すと、ぼくたちはひそひそ相談した。

「なんか、あいつ、すかしとるやん。東京弁しゃべつとるで。えらいキザや。ほんまは悪い人間やと思う」というのが、クボキの断固たる意見。

当時、大阪府に住むぼくたちの間で、関東の言葉を話す人間は、それだけでキザで、よそよそしくて、ええ格好しいで、とにかく心を許してはいけけない存在だと考えられていた。

黒縁メガネの男は、言葉づかいだけでいうなら完全にその範疇に入つていた。

「でも、よう見てみい。あのおっさんのどこがキザやねん」とやっちゃんが指摘した。

確かにその通りなのだ。ほさほさの髪、脂で汚れた眼鏡のレンズ、よれよれのシャツ、彼のどの部分をとつても、ぼくらのイメージの中の「ええ格好しいの東京人」とは相当ずれていた。

男は三十代で、摂津知雄、通称せちあん、つまり「摂知庵」だと自己紹介した。彼はす

ぐにぼくたちの間では「せちゃん」と呼ばれることになる。

彼は数カ月前に東京からやってきた。なんとかという大きな会社に勤めていたが、事情があつて辞めたのだという。

「この家はぼくの父の知り合いのものでね、このあたりの新興住宅地の元地主だったんだ。父が昔買ひ取つたのをぼくが相続して、改装中というわけ。部屋が汚くて悪いけど、まあ、これも環境整備中ということ許してほしい」

彼は客を迎え入れたのが嬉しくて仕方ないというように話し続けた。その様子があまりに屈託がなく、やがてぼくらの疑念は氷解していった。耳についていた東京弁も気にならなくなった。

まあ、ぼくたちはこの十日間というものの、ずっとこの人物が所有している建物を見張り続けていたわけで、元々興味津々なものだ。好奇心は易々と警戒心を凌駕する。

「あの銀色のドームは何をするん？」とうとう我慢できなくなつてぼくは聞いた。

「見てみるかい？ 中はまだ完成してないけど」

居間には勝手口がついていて、そこがドームの入口に直結していた。

一言で言つて、そこは **X** だった。外から予測できた通り、剥き出しの金属の骨組みに厚めのシートが張り付けられているだけのテント構造だ。床には工具の類や見たこともない機械が散らばっていた。天井の銀色のダクトから風が吹き出して、それがぼくたちの目にはなんととも言えず **Y** だった。人がくつろぐ場所なんてないのに、妙に落ち着く不思議な空間だった。

しばらくそこで過ごすうち、外が暗くなつてきた。すると、ドームの内壁が淡く光りを放つように思えた。それをバックに話す黒縁眼鏡は、なんだか後光がさしているようにも見え、ぼくたちは厳かな気持ちになつた。

「後何日か経つたらこも完成するから、また来るといいよ。面白いものを見せてあげる」

「だから、何をするん」

「すぐに分かるよ。またおいで」

彼は顔をくしゃくしゃにして、子供みたいに笑つた。

(川端裕人「せちゃん——星を聴く人——」による)

【注】

*1:一九七〇年、大阪の千里で「日本万国博覧会」が開かれた。

*2:他を追い抜いてそれ以上になること。

*3:仏・菩薩の体から差すという光。また、それを表すために仏像の後ろに添えた

輪。

問一「ちよつとした事件」の説明として間違っているものを、次の選択肢から一つ選び記号で答えなさい。

- 1 敵に気づかれた可能性があり、悪者退治の課題が増えた。
- 2 アジトのあやしいお皿が移され、外から見えなくなった。
- 3 敵アジトとお皿を取り巻くように、木製の柵が作られた。
- 4 柵のせいで、アジトの中が隠れ家から見通せなくなった。

問二「中をのぞいた」とあるが、このときの「ぼく」たちの説明として最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

- 1 突如敵アジトに出現した銀色のドームに不思議さを感じ、悪者退治の必要をこれまで以上に感じはじめている。
- 2 悪者退治のこと以上に銀色のドームにえもいわれない魅力を感じ、すぐ近くで見たくてしかたなくなつている。
- 3 銀色のドームに千里の万博の華やかさを思い出して、自分たちで独占したい気持ちを抑えられなくなつている。
- 4 敵を退治しなければと思ひながらも銀色のドームへの強い興奮で、アジトの主との関係を築きたくなつている。

問三「声もなく凝固した」とあるが、このときの「やっちゃん」の説明として最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

- 1 臆病ながらもアジトの主に対するおそれを振り払い、逃げる機会をうかがつて動かずにいる。
- 2 勤が見事に当たつたことに自分で驚き、アジトの主を心を見通されないようじつとしていく。
- 3 アジトの主との突然の対面に心の準備ができておらず、おののきで何もできなくなつている。
- 4 突如現れたアジトの主に対する反感がじわじわとわいてきて、身動きがとれなくなつている。

問四 「やがてぼくらの疑念は氷解していった」とあるが、これはどういうことか。分
りやすく六十字以内で説明しなさい。

問五 空欄 X、 Y に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の
選択肢から選び記号で答えなさい。

- 1 X 無機質 Y 現実的
- 2 X 未来的 Y 近代的
- 3 X 機械的 Y 現実的
- 4 X 殺風景 Y 未来的

問六 「ぼくたちは厳かな気持ちになった」とあるが、このときの「ぼく」たちの説明と
して最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

- 1 魅力的なドームを背にして話す黒縁眼鏡の彼が、実は悪者でなくて「ぼく」たち
にとって優しく親しみやすい人物であると感じている。
- 2 未知のドームを背景にしている黒縁眼鏡の彼の姿を、「ぼく」たちとかけはなれた
世界にいる尊い存在であるかのようにも感じている。
- 3 不思議なドームを背にした黒縁の眼鏡が、「ぼく」たちに特別な力をもたらす未知
の道具であるかのように感じられて圧倒されている。
- 4 淡く光を放つドームを背景にした黒縁眼鏡の彼が実際には存在しないようにも感
じ、普通ではありえない経験をしていると感じている。

問七 「彼」の人物像として、最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

- 1 子供に心を開く優しい心をもちながら、自分のすべきことを抜け目なく実行する
野心的な人物。
- 2 屈託がなくお人よしで相続なども人に言われるままに従う、他人を尊重すること
にたけた人物。
- 3 純粋さがありいろいろな好奇心が強く、子供たちとも気さくに接することのでき
る素朴な人物。
- 4 正直で自分が決めた道をまっすぐに進んでおり、自ら子供たちを導こうとしてい
る尊大な人物。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

群馬県の上野村で、ある日何人かの村人と茶飲み話をしていると、一人が「俺の親父は
偉かった」と言いだした。面白いのはその理由だった。

彼の家は村の東のはずれにある。逆に、この村で私が常宿にしている鉱泉宿は、西のは
ずれにあつて、この二軒の家は、歩けば半日の距離ほど離れている。彼の父親は、かつて
その距離を歩いて、ときどき鉱泉旅館へと湯治にかけたのだという。

何日か鉱泉宿に泊まり、父親は帰宅の途につく。ところがその帰路の旅には、一週間ほ
どかかるのが普通だった。何てことはない。帰り道、先々の家上がりこんでは泊まって
しまうから、なかなか家には着かないのである。まだ家々に電話はなかったけれど、村の
情報網は素速いものがあつて、鉱泉宿を出たという話はじきに伝わってきた。そうすると、
家の人々は、それでは一週間もたてば帰ってくるだろうと思っていた。

「それができる親父は本当に偉かった」と、いまでは自分も高齢にさしかかっている息
子は言った。どこの家に寄っても歓迎される親父だった。誰もが誘ってくれる親父だった。
半日の距離に一週間かける人生を、許すことのできる親父だった。

この話を聞いていた村人は、誰もがそうだという顔をしていた。そして私にも、彼の父
親が、とても偉い人のように感じられてくるのだった。

もしかすると、そんな人はかつては、たくさんいたのかもしれない。しかし、それがで
きなくなった今日になってみると、彼の父親は、 X な自由をもっていた人のよう
にも思えてくる。彼の父親は、時間を創作する自由をもっていたのである。だから、彼の
父親の行く先々で、村の時間が生まれた。

今日の私たちの時間は、同じ速度で、 Y に過ぎ去りつづけている。過ぎ去る時
間に追いかけれられ、時計の針を気にしながら、毎日を過ごしている。時間は絶対的な権力
であるかのように、私たちを支配する。

しかし彼の父親がつくりだしていく村の時間は、そういうものではなかった。彼の父親
が登場したとき、その時間がつくられはじめるのである。

おそらく村人は彼の父親の姿をみかけると、気軽に声をかけ、家へと誘ったのであろう。
そうすれば、結局泊めることになるのは承知のうえで。そして村人は、彼の父親がいるこ
とによって生まれる時間を、みんな楽しんでのたろう。

この時間は、時計が刻んでいく近代的な時間とは異なる。時計の時間は、いつも一方的
に過ぎ失っていくけれど、この村人の時間は、そこにいる者たちの手で、つくられつづけ
ていくのである。それに、おそらくこの村人の時間は、等速で刻みつづけられるものでも

なかつただろう。ちょうど農業とともにある時間がそうであるように、時間はときに凝縮されて気ぜわしく動き、ときに呆けたように、ゆっくりとした歩みをみせたことだろう。

おそらく彼の父親は、村人の労働の時間のなかに、いつとこの間をつくりだしていたのである。彼の父親が現れることによってしか生まれない時間がつくりられ、その時間は、労働の時間のなかでは、いつとこの間である。

私たちは、自由の権利や自由の義務と結びついた近代的な自由だけを、自由だと考えがちである。

I 私には、それだけが自由だとは思えない。時間を自由につくりだしたり、時間の歩みを変えていったりする自由も、人間にとっては根源的な自由のひとつだと思うのである。

II、彼の父親がもっていたような時間の自由、それは彼の父親が考えだしたも
のではなかった。おそらく、その時間を成立させたものは、村の生活そのものであり、彼の父親がつくりだしてきた村人とのそれまでの関係だったのである。村人の日々の労働との関係のなかに、彼の父親が現れ、村人はふとその働く手をとめて、彼の父親との関係のなかに入っていく。そんな関係の世界が、ここにはあつたはずである。その関係のなかに、時間は生まれていった。

とすると、うらやましく思うものは、彼の父親がつくりつづける時間というより、そんな自由な時間の創作を可能にした、彼の父親とともにあつたさまざまな村の関係のほうなのかもしれないのである。

いまでも、飛行機にはあまり乗りたくないと思っている。特に長距離になると、時間軸が強制的に変更されるような感じがして、自分の時間世界がメチャクチャにされたような気がしてくる。

III 飛行中は、ひたすら飛行時間が終わるのを待つだけで、そこに旅の時間がないのも面白くない。

それにしても、いつから旅行中の移動というものは、こんなにつまらないものになつてしまったのだらうと思うことがある。以前は、移動そのもののなかに「旅」があつたはずである。それが、いつの間にか目的地への「移動」になつた。そして、移動にかかる時間が、わずらわしく感じられるようになつてきた。そこで、私たちは、旅のなかでもいかに速く着くかなど上手に時間を管理するようになった。そのとき、旅の楽しさも薄れていったはずなのに。

現代人は、適切な時間管理ができていくかどうかを、すぐれた生き方の基準にしているような気がする。時間の管理という発想は、二十世紀初期の工場改革のなかから生まれたものに違いないが、それは時間が商品をつくりだしていく工場のかたちを、創造するため

の発想だつた。労働者の腕や術がものをつくりだす時代から、時間管理のもとで決められた作業をすれば商品がつくりだされていく時代への転換が、この発想をもとにしてすすめられたのである。この変更がうまくいったところでは、工場の主役は管理された時間に移り、労働はその道具になつた。

ちょうど「旅」が「移動」に変わったように、このとき労働もまた標準作業にと変わったのである。

C 同じようなことを、現代社会はあらゆる面で、おこなつてきた。こうして、時間を上手に管理することが目的になり、時間の流れを超越したような創造の楽しさは、少しずつ失われていった。

そんなふうと考えていくと、現代人たちは、自分の一生でさえ、時間管理の発想でとらえるようになってきた気さえするのである。学生時代の時間を無駄なく管理し、定年までの時間を上手に管理し、そのことによって老後の時間を破綻しないように管理する。それがかしこい人生だともいうように。こうして、私たちは、永遠につづく時間の自己管理計画をつくり、その計画に追われるようになった。

そして、ふと気がつくと、私たちは、管理する必要のない時間が現れてくることに、恐怖さえしているのである。多くの者が死を恐れるのは、死が時間の管理の消滅へと私たちを導くように、思われるからなのかもしれない。もしかすると、現代人たちは、主体的であるということ、しっかりした時間の自己管理をおこなうことだとなんとなく理解している、時間の自己管理が必要ではなくなることに、主体の消滅を感じとっているのかもしれないのである。とすれば管理する時間の喪失は、現代人にとっての「死」である。

(内山節「自由論——自然と人間のゆらぎの中で」による)

問一 空欄 X、Y に入る言葉として最も適当なものを、次の選択肢からそれぞれ選び記号で答えなさい。

- 1 直線的
- 2 循環的
- 3 根源的
- 4 絶対的
- 5 具体的

問二 空欄 I、II、III に入る言葉として最も適当なものを、次の選択肢からそれぞれ選び記号で答えなさい。

- 1 それとも
- 2 しかも
- 3 やはり
- 4 ところで
- 5 しかし

問三 「一人が『俺の親父は偉かった』と言いだした」とあるが、どのようなところが「偉かった」というのか、四十字以内で説明しなさい。

問四 「以前は、移動そのもののなかに『旅』があったはずである」とは、どのようなことだと考えられるか。次の文の（ ）に入る適当な内容を、「風景や人」「時間」という言葉を使って、五十字以内で書きなさい。

以前の旅行では、（ ）はずだということ。

問五 「同じようなこと」とは、どのようなことか、最も適当なものを、次の選択肢から選び記号で答えなさい。

- 1 どのような人間が関わっているかに関係なく、時間を管理する中で可能な限り機械を使うことで、目的を果たせるようになること。
- 2 最終的に生み出される商品や、行き着く目的地よりも、そこに至る過程にどれだけ時間を管理することができるかが重要になること。
- 3 個々の人間の独自性や創造性に関係なく、取り仕切られた時間の中で決められたことをすれば必要なことが果たせるようになること。
- 4 生み出される物の個性や美しさよりも、組織化された時間に沿って生み出される物の実用性にこそ価値を見いだすようになること。

問六 本文の内容に合致するものを、次の選択肢から二つ選んで記号で答えなさい。

- 1 村人の父親が鉱泉宿から一週間で帰ってくるという情報は、村の素早い情報網によって家にすぐに伝えられたと考えられる。
- 2 村人の父親がもつ時間を創作する力により、当時の村人の間にはもともとなかった関係が新たに作り出されたと考えられる。
- 3 現代人は時間の自己管理に主体性を見だし、主体の消滅を恐れつつ一生を時間の自己管理に追われているのだと考えられる。
- 4 私たちは、時間を創作する自由を失うことを恐れるあまり、永遠につづく時間の自己管理計画に追われていると考えられる。
- 5 村人の父親は当時の村人の労働にいつと時の間をつくりだし、皆はそこに生まれる独特の時間を楽しんでいたと考えられる。

第三問 次の傍線部のカタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらが

なで答えなさい。

- 1 両手で鉄棒をニギる。
- 2 社会にコウケンする。
- 3 スルドい指摘を受ける。
- 4 複雑なケイヤクを結ぶ。
- 5 成功のゲンエイを追い求める。
- 6 粘り強く交渉を続ける。
- 7 今日は籠って仕事をする。
- 8 計画は漸次進展しつつある。
- 9 過去を細かく詮索する。
- 10 綻びが生じるのを見てとる。

第四問 次の各問いに答えなさい。

問一 次の(1)、(2)の傍線部の用言と、活用形(例 未然形 等)が同じものを、後の1

〜4の傍線部からそれぞれ一つずつ選び記号で答えなさい。

- (1) 学校から駅まではそう遠くない。
 - 1 部屋がきれいになった。
 - 2 電車で行こう。
 - 3 いつでも来いと言われた。
 - 4 真っ赤な花を買う。
- (2) 明日は早起きせざるを得ない。
 - 1 歌を聴くと、心が和む。
 - 2 犬はあいかわらず元気だった。
 - 3 りんごを食べます。
 - 4 家の外はさぞ寒かろう。

問二 次の(1)、(2)の文の□の語が修飾しているのは、傍線部1〜4のうちどれか。

それぞれ一つずつ選び記号で答えなさい。

- (1) □¹せっかく¹ 楽しみにしていた チケットが² 当選したのに、当日にカゼをひいて見に行けないなんて、彼は³ ついていないね。
- (2) □³あの³ すばらしい¹ かつて⁴ 経験した¹ こともなかったほど 感動的な² 異国の日没を³ 私は二度と見る⁴ ことは⁴ ないだろう。

問三 次の文の傍線部の「でも」と文法的に同じものを、後の1〜4から一つ選び記号

で答えなさい。

ジュースでも飲まないと疲れがとれない。

- 1 雨はやんでもいない。
- 2 この技はプロでもできないと思う。
- 3 何度読んでも覚えきれない。
- 4 部屋はそれほどきれいでもない。

第五問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

禽虫きんちゅうのたぐひ、恩おんを知れるためし、これ多し。
(鳥や虫)

*1 漢武帝かんぶてい、*2 昆明池こんめいちにあそび給たまふに、一つの鯉こひの鉤こうを含み
(釣り針を飲み込んで)

て、死なむとするあり。帝てい、これを見て、人をしてとき

はなち給へり。その夜、帝の夢中に鯉来りて、悦よろこびけり。
(感謝した)

次の日、池に行幸みゆきし給ひけるに、昨日の鯉の、明月の珠たま
(夜でも光を発する宝玉)

を含みて、池の辺に置きて去りぬ。そののち、かの池の

釣魚てうぎよをとどめられけり。

*3 隨侯ずいこう、やぶれたる蛇へびを見て、薬をつけていやす。蛇た
(傷ついた)

すかりて去りぬ。のちに珠を含みて報ず。隨侯、珠をえ

て、家富み栄えけり。夜光の珠とて、その名くもりなし。

〔十訓抄〕による

【注】

- *1…中国の前漢の皇帝。
- *2…漢武帝が作らせた大きな池。
- *3…中国の隨の領主。

問一 「あそび給ふ」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

問二 「これを見て、人をしてときはなち給へり」とは、どのようなことを表しているか。

- 1 人が死にそうになっているのを見て、助けて帰してやった。
- 2 死にそうな鯉を見て、人に命令して鯉を助けて放してやった。
- 3 死にそうな人を見ていると、その人の姿が鯉になって離れていった。
- 4 鯉が死にそうになっているのを見て、人助けするかにように助けた。

問三 「悦びけり」「含みて」「去りぬ」「とどめられけり」のうち、主語が違うものを一つ選び記号で答えなさい。

問四 この文章について述べた次の文の(Ⅰ)～(Ⅳ)に入る適当な言葉を、本文の中からそれぞれ三字以内の一単語で抜き出して書きなさい。

隨侯から受けた(Ⅰ)に、(Ⅱ)が(Ⅲ)をもつてむくいたという話は、漢武帝と鯉の話とともに、(Ⅳ)の情け深さを語るエピソードである。

【二〇二〇年度入学試験解答A日程／国語】

第一問 30点

問1 2 4点

問2 2 4点

問3 3 4点

問4 例 建物の様子や東京弁から、男は心を許してはいけない存在だと警戒していたが、あまりに屈託がない様子から安心感が生じたこと。(59字) 6点

《採点基準》

・「建物〔部屋〕の様子や東京弁〔関東の言葉〕を話すことから、男が心を許してはいけない存在〔キザ・よそよそしい・ええ格好しい・悪い人間〕だと考えていたが、」という内容を書いている。

・「(ぼさぼさの髪〔脂で汚れた眼鏡のレンズ・よれよれのシャツ〕などや、)男の(あまりにも)屈託がない様子から、安心感が生じた〔警戒心が解けた・心が穏やかになった・キザでない〕とわかった・ええ格好しいでない〕とわかった・悪い人間でない〕とわかった」という内容が書いている。

問5 4 4点

問6 2 4点

問7 3 4点

第二問 30点

問1 X 3 Y 1 各2点×2

問2 I 5 II 4 III 2 各2点×3

問3 例 どの家にも歓迎され、半日の距離に一週間かける人生を許すことができたこと。(38字) 6点

《採点基準》

・「どこの家にも歓迎された〔誰もが誘ってくれた〕」
 ・「半日の距離に一週間かける(人生を許す)ことができた」という内容を書いている。

・「……と(ろ)。「……点。「……こと。」などの文末で書いている。

問4 例 途中でさまざまな風景や人に出会うことの中に、時間の流れを超越したような創造の楽しさがあった(46字) 6点

《採点基準》

・「途中で風景や人に出会う中で(途中で出会う風景や人との間に)」
 ・「(時計が刻む時間〔管理された時間〕とは違う、創造の〔時間を作り出す・時間を自由に創作する〕)楽しさ〔自由〕があった」という内容を書いている。

・()に当てはまる形で書いている。

問5 3 4点

問6 3・5 各3点×2

第三問 20点 各2点×10

- 1 握(る) 2 貢献 3 鋭(い) 4 契約 5 幻影
- 6 こうしょう 7 こも(つて) 8 ぜんじ 9 せんさく
- 10 ほころ(び)

第四問 10点 各2点×5

問1 (1) 1 (2) 4

問2 (1) 3 (2) 3

問3 2 2

第五問 10点 問1・問3各2点×2 問2・問4各3点×2

問1 あそびたもう

問2 2

問3 エ

問4 I 恩 II 虻 III 珠 IV 禽虫 (完答)